

■ 書 評



成人アスペルガー症候群の 認知行動療法

ヴァレリー・L・ガウス 著
伊藤絵美 監訳
吉村由未, 荒井まゆみ 訳
星和書店 2012年11月
456頁, 定価 3,990円

「私はメンタルヘルスの主流派コミュニティに属する専門家が、自分は発達障害には対応できないと考えていること、あるいは発達障害にあまり関心を持っていない実情を目にしてきた。一方、自閉症スペクトラムの専門家は、もっぱら子どもに目を向け、子どもや若い世代に焦点を当てた行動的介入ばかりを強調しがちである。その結果、極めて多くの成人のアスペルガー症候群患者が、治療から取り残され、日常生活上の問題に苦しみ、治療すれば回復するはずの二次的な精神障害に苦しんでいる」

これは本書の著者前書きにおいて指摘されている、アスペルガー症候群、自閉症スペクトラムの治療を巡る米国精神医療の問題点であるが、わが国におけるアスペルガー症候群、発達障害の方への治療環境についても、同じような指摘がなされるのではないだろうか？

本書はこの問題提起に基づき、著者のカウンセリングルームを訪れる、中年、老年期の方も含めたアスペルガー症候群の成人に提供される、包括的な治療戦略について、読者が再現可能なほど具体的にまとめられた労作を、日本において認知行動療法の臨床に携わり、手探りで治療的アプローチを模索している臨床家らによって翻訳されたものである。

本書の構成は著者、翻訳者それぞれの思いを含む、やや長めの序文に続いて、アスペルガー症候群の成人期の事例6例の提示があり、鑑別診断

も議論されつつ解説され(第1章)、アスペルガー症候群の症状から社会的問題へより深刻な合併症状にどのようにして至るかが、理論的根拠をもとに図示(本書の肝でケースフォーミュレーションと定義)され(第2章)、初期のアセスメントのための着眼点(第3章)、個々のケースへの治療計画の立て方、(第4章)患者への説明の仕方、必要なコーピングスキルを増やすための方策(第5・6章)、感情障害などの合併する精神症状への対策(第7章)、補助的治療・他治療者との連携・その他の諸問題(第8・9章)の順に章立てされ、治療の終結について締めくくられる(第10章)。付表として参考文献のほか、参考書籍、ウェブサイトを紹介も充実している。

1つの病態のみ述べた本で、400頁に渡る厚みある一冊であるが、全章を通して、効果的な図表が多用され、身近で具体的な生活上のエピソードによって、より深みを持った疾患の理解が出来る症例提示がなされており、ボリュームが増しているため、認知行動療法的な治療戦略のみではなく、成人アスペルガー障害の全体像をつかむのにも役立つと考えられる。また翻訳書であるが、邦文は自然で読みやすく、我が国でアスペルガー症候群を持つ当事者に関わるすべての関係者への専門書としても、適切な一冊と考えられる。

著者前書きに、家族への愛情の感じられる表現で、著者の仕事について知ったその父が、自らのことを誇らしげに「アスペルギアン(Aspergian)」と呼ぶようになったという記載がある。あえてこのエピソードが冒頭で紹介されている本書は、アスペルガー症候群の問題点にのみ注目し、当事者の個性を殺してまで、それらを除去するための方策ではなく、障害の背景にある「強み」を生かすための、アセスメント、治療プランの提案が随所に見られる点の特徴としている。これは日本の精神医療の現場で、発達障害にまつわる諸問題に日々葛藤する臨床家にとっても、非常に有用な着眼点であると考えられる。

(今村 弥生)